

多文化を	ささえる	人びと
------	------	-----

小さな善意から生まれる可能性

「中国帰国者」を支援する山本慶一さん

中国帰国者は他の在日外国人と異なり、行政による支援政策が比較的早くから存在していた。とはいえ、支援策は必ずしもすべての当事者に届くわけではないし、問題も多く残されている。これを補うのは、多くのボランティアたちである

中国帰国者は日本人なのか、それとも中国人なのか——彼らをどう認識するかによって、ボランティアの支援活動も異なってくる。しかし、そのボランティアの多くは中国帰国者に日本人としての振る舞いを期待したり、日本人になることを要求するなど、日本社会への同化を一方的に求めがちである。

このようなボランティアが多いなか、山本慶一さんは「どの国の人かではなく、人間どうしの付き合いこそが大事」という立場から、長年中国帰国者を支援してきた。その支援活動から、多文化を支えるもうひとつの可能性を感じ取ることができる。

小さな善意による日中友好の集い

阪急十三駅西口から北へ徒歩約一〇分のところに、社会福祉法人大阪自興会の重度身体障害者援産施設



山本慶一さん。支那帰国者や中国帰国者の写真やビデオのデータを整理している

「希望の園」がある。毎年五月の三日曜日、「小さな善意による日中友好の集い」（善意の集い）がここで開催される。

とはいえ、中国帰国者の問題はこれですべて解決されたわけではない。個々の問題は依然として残されたままである。

「中国帰国者」を支援して

善意の集いのはじまりを契機に、山本さんの中国帰国者支援が本格化した。行政からの委託を受けて、一九九一年から自立指導員、一九九四年からは特別身元引受人として、自立促進と帰国援助を支援した。委託期間は三年だが、山本さんはそれ以後も個人として相談にのり、支援し続けている。



「善意の集い」。料理を食べながら演し物を楽しむ



中国の楽器を持ち合って演奏し、場を盛り上げる

行政の支援政策を受けていても、日本社会とかかわる機会に恵まれな中国帰国者にとって、日常生活のアドバイスまでしてくれる山本さんの存在はとても大きい。

「山本さんなら、なんでも手伝ってくれる」という評判が中国帰国者のあいだに広まり、相談にやってくる人が増え続けた。山本さんがこれまでなんらかのかたちで支援した中国帰国者の数は、一九六所帯にも達している。

善意の集いの誕生は一九八五年にさかのぼる。大阪自興会が日本に永住した中国帰国者を励まし、かつ日本人の理解を促進するため、地域の民生委員や婦人会などに呼びかけて激励会を計画した。当時、民生委員だった山本さんが計画していた中国留学生との食事がこれに合流することから善意の集いははじまった。

善意の集いへの参加者は当初二〇人余りであったが、年々増加し、二〇〇八年には約一九〇人に達し大盛況であった。中国帰国者、民生委員、ボランティアや行政関係者のほか、一九九〇年からは中国総領事館の関係者も参加する。会場では中国帰国者どうしが家族や知人ごとにテーブルを囲み、賑やかなことこのうえない。

日本語が不十分で、普段は外出も少なく、問題を抱えていても解決する情報が欠如している。そういう中で、賑やかなことこのうえない。

日本の文化や習慣に親しみの乏しい中国帰国者からの相談は、日本社会での自立や適応に止まらず、家庭事情にまで及ぶ。なかには葬式のアドバイスから結婚相手の紹介や式場の問題などもある。

山本さんはいつも親身になって相談に応じたが、日本のしきたりに従ってもらうのではなく、日本の習慣を説明したあと、最終的な判断は当事者に任せている。

もうひとつの可能性

山本さんは言う。中国帰国者とはいえ、決してみなと同じではない。中国で生活していた地域や民族によっても文化・習慣は異なるし、個人のパーソナリティも異なる。だから、彼らを同じように捉えるようでは付きあいきれない。「人間どうしの付き合い」という考え方が必要という所以である。

山本さんがこう考えるようになったのは、ふたつの体験に基づいている。ひとつは民生委員時代に実践していたノーマリーションである。つ

南誠（本名・梁雪江）
民博 外来研究員（日本学術振興会 特別研究員P.D.）

専攻は国際社会学・歴史社会学。近年は境界を跨がって生きるエスニックマイノリティの文化や生活世界に関心をもちている。共著に、『多民族の二ホン』（二〇〇四年）、『満洲—記憶と歴史—』（二〇〇七年）など。

国帰国者にとって、善意の集いは安らぎの場であるばかりか、情報交換や情報収集の場でもある。就職、日本語教育、住宅や学校などの日常生活に関する情報も交換される。地域の警察が交通安全や違法駐車などについて説明することもある。

多くの中国帰国者にとって、この日は春節にも匹敵する楽しい年行事でもある。中国帰国者も客として参加するだけでなく、実行委員に加わり、事前準備や当日の進行にもかかわっている。



集いの料理を準備する。現在は衛生上の関係で作る品数が限られる

まり障害者にも、健常者と同様の権利を可能な限り保障しようとする取り組みである。

もうひとつは、五〇回以上も海外の少数民族の村を訪れた体験である。そこでは異文化と交流し、その難しさや楽しさを実感した。山本さんは、これらの経験が、「人間どうしの付き合い」という考え方を支えていると思っっている。

一方的な支援ではなく、「人間どうしの付き合い」という立場で対話し、相互理解を深めるなかで問題解決を目指す。そうしながら多くのことを学んだと話す山本さんに、私は多文化社会におけるマジョリティのあるべき姿を見る思いがした。